011　TomyJr.「風の男　白州次郎」青柳恵介・著／新潮社／1997 年　★★★☆☆

戦前戦後を通じ吉田茂の懐刀として英米政財界人や国内政治家、官僚達を動かし、占領期間中、GHQ が「従順ならざる唯一の日本人」と本国に打電した男。芦屋の上流家庭に生まれ、中学生にしてアメ車を乗り回し、英国留学でケンブリッジ大学を卒業した後、英国流のデモクラシーとジェントルマンシップと独自のプリンシプルを身に着けた本物の国際人。日本は必ずや英米との戦争に突入し敗北すると確信し昭和 15 年に全ての職を辞して鶴川に農地を買って農事に専念、終戦後は GHQ と日本政府との間に入って大立ち回りを演じ、新憲法の制定や通産省の設立などに力を発揮し、80 歳過ぎまでポルシェを乗り回した元祖・チョイ悪オヤジ。GHQ 民政局長ホイットニー准将に「あなたの英語は大変立派な英語ですね」と言われた際「あなたももう少し勉強すれば立派な英語になりますよ」と答えたという口の悪さ、一方で友人知人や弱い者が困ったとなれば真っ先に手を差し伸べる情の厚さと子供のような純粋さを生涯持ち続けた「育ちのいい生粋の野蛮人」。彼に世話になった人がお礼にと彼に金品を渡そうものなら激怒し、「おれは大金持ちなんだぞ！こんなもの貰えるか、バカヤロー」と怒鳴って追い返したという。彼のエピソードを知れば知るほど、まさに「ノブレス・オブリッジ（noblesse oblige)」を地で行った人だったのだと思う。最近、流行の「セレブ」が単なるスノッブ（俗物）で あってノブレス（高貴）でないのはこの要素が決定的に欠けているからに違いない。
ノブレス（高貴）は今の日本に欠けている最も大事な要素かもしれない。ヨーロッパは 階級主義が根底にあるが、これを開放したのがアメリカであり、アメリカン・ドリームとは実力さえあればセレブになれるという思想だ。しかし、ヨーロッパの精神風土を受け継ぐアメリカには「ノブレス・オブリッジ（noblesse oblige)」の思想が残っており、セレブになったら慈善事業や社会活動をしないと尊敬されない社会でもある。これに対し、日本も戦前まではヨーロッパと同じく階級主義が残っていたが、戦後はやはりこれを開放した。しかし、そこにはヨーロッパの精神風土はないため「ノブレス・オブリッジ（noblesse oblige)」の思想はない。しかしその代わりに儒教的な年功序列思想と平等主義があったため、実力があってもセレブにはなれなかった。しかし、ここに きて年功序列賃金や終身雇用という社会システムが崩れ、能力成果主義に変わりつつある今、実力さえあれば金も権力も名誉も手に出来てセレブになれる上、何の責務も使命も要求されない。「儲けて何が悪いのか」「お金で買えないものはない」「皆さんが私を嫌いになったのは滅茶苦茶儲けたからですよ」と公言でき、それに対して明確な反論をする思想的な基盤がない社会になってしまっているのが今の日本ではないか。 ただ、上記は私が感じた勝手な仮説に過ぎず、この本に書かれているわけではない。
本の内容に戻るが、晩年、軽井沢の別荘でのエピソードとして、こんな話が出てくる。 新聞で最近の中学生の荒れぶりを読んだ次郎が、俺なんてあんなもんじゃなかった、と掃除をしている使用人につぶやく。「旦那様も不良だったのですか」と聞かれ「そう、 不良。それで島流しになっちまったんだよ」と答える。「どこに流されたんです」と尋ねると、次郎は窓の方に向きなおり、ぽつんとこう言ったという。「イギリスっていう島さ」